

## 延命を やめる勇氣

元国務大臣

(地方創生・規制改革・女性活躍・  
まちひとしごと・都市再生・特区)

自民党政務調査会長代理

金融調査会長・党税制調査会副会長

参議院議員

片山 さつき



母、朝長規子は大正一四年生まれで、東京女子大学出身の地頭の良い女性でした。母は、防空壕にお米を持って何度も逃げ込んだ、東京大空襲の経験者でもあります。

当時の東京には「危機的状況になったらすぐに非難する」という意識があまり浸透していませんでした。今、私は国民保護のためのシエルターを作る議員連盟を立ち上げ、幹事長を務めていますが、こうした取り組みは、母が東京大空襲の生き残りであることと無関係ではありません。

母は二八歳で東大出の数学者の父と結婚し、若くして教授になった父は浦和に家を構え、そこで私が生まれました。

手先が器用な母で、幼いころは、家のパン焼き機でシュークリームを作ってくれたものです。

母に勉強を教わった記憶はありませんが、小学校のPTAで仲のよかった二・三学年上の子の教科書をもらってきては私にくれました。私は自分でそれを読み、クラスで計算できない子の面倒をみていました。

父と結婚してから母自身は専業主婦になりましたが、大学の同



東京女子大学の同窓会の園遊会で母と母のクラスメイトと。こういう日はあつらえた服でおしゃれさせてもらっていました

級生には世界的ファッションデザイナーの森英恵さんや、女性で初めて高島屋の役員に就任した石原一子さんがいたこともあり、私は母に子供のころから社会での活躍を期待されて育ちました。東大から大蔵省に入省した時も、母は幅広い活躍を私に期待して喜んだのだと思います。日銀幹部を務めた親戚などあちこちに電話してましたから。

今も悔いの残ることがあります。

二〇〇九年、母は肺炎を拗らせ、危篤状態に陥りました。かうじて生き延びましたが、当時は控えていた選挙が苦しい戦いで、大切な決断を先延ばしにして、延命措置に関する問いに全部同意してしまったのです。その結果、母は療養型病院で、意識のないまま三年近く生きました。

胃ろうをして人工呼吸器をつけた母に、私は多分恨まれていたと思います。

必ずしも延命が正解とは限りません。延命をやめるには勇気が要ります。ただ、一人っ子の私には、その勇気がなかったのです。今もそのことが悔やまれます。